

---

# Fate × 東方 あたしを誰だと想ってるの！？

リョク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate × 東方 あたしを誰だと想つてるの！？

### 【NNコード】

N3574Y

### 【作者名】

リョク

### 【あらすじ】

「俺を転生せろ！」と、言つ身勝手な存在のせいで少年は正史で召喚する黄金の剣を持つ少女を先に身勝手な存在が召喚した。そして少年は参加することが出来なくなり、死ぬしかなかった……。

だがFate（運命）はそれを許さなかつた、その代わりに召喚されたのは……我侭な天人だつた。

\* 注意

この小説は独自解釈などがあります。  
無双、最強系では無いのでその設定が嫌な人にはお勧めしません。

## 召喚と説明（前書き）

まさかのあの人ガサーヴァントに！？  
そんなお話始まります！！

ある武家屋敷、そこにはその家の主である衛宮士郎しか居ない。

「ぐあッ！！」

一人の青年、さつき話した衛宮士郎がそこには居た。

そして青い全身タイツ男が紅い槍を持って衛宮士郎の命を狙つていた。

理由は一つだけ、衛宮士郎には心当たりがあった。

先ほど、学校でこの全身タイツ男と戦っていた白と黒の双剣を持った赤い男と鎧を着た金髪の少女が戦つていたのだ、その人外の戦いを見ていたことに気付かれ、必死に校内まで逃げた。だがこのタイツ男に追いつかれ槍で心臓を貫かれた。

その後、何故か知らないが校内で目を覚まし家に帰った。  
服についた赤い血と傷口も消えていない状態でだ。

その後、今度こそ命を取る！と言わんばかり青タイツの男になぶら  
れているのだ。

そして衛宮士郎はタイツ男に腹を蹴られ、一般人から見て物置、魔術師どころか半人前の衛宮士郎にとつては工房だ。

…………正史であればここで衛宮士郎のサーヴァントになる少女、セイバーが現れるだろ？  
…………だが生命に反逆し記憶を持ったまま転生した存在に召喚されている…………。

つまり彼には聖杯に参加することは出来ないのだ。

「ほお～、魔術師だったのか」

タイツ男は工房を見てそう言った。

「まあいいか

そう言つてタイツ男は紅い槍で衛宮士郎の命を奪おうとした。

俺は……………こんな所で死ぬのか？

嫌だ！！死んで……………死んでたまるか！！！

だが物語には奇跡が起こった、いや、世界が彼の死を望まなかつた  
と言うべきか……………

突如、床に魔法陣が現れ、そして地面が輝いた！

「おい……………まさか……………八対目か！…？」

光り輝いている魔法陣の上にエーテルで身体が構成される……………そ  
れは次第に人の形になり、光が収まつた瞬間タイツ男に蹴りをかま  
した。

「ぐあ！…！」

タイツ男は蹴りでぶつ飛び工房から追い出された。

「はあ～」

士郎はその溜息をはいたま、さつき魔法陣から現れた存在を見た。  
その格好は現代風の服に似ており、髪は青い長髪、黒い帽子に桃を

着けたあまりにもふざけたファッショングリーンだった。

士郎はその少女の姿をずっと見ていた、とても可愛らしく、そして美しい外見だ。

見惚れるのは当然だった。

「全くあの妖怪め…………いくら退屈と言つても私を飛ばすなんて嫌いだから? まあ私も嫌いなんだけどね、アイツのこと」

少女は少しだけ早口で言つた、そして士郎の方を向き……

「サーヴァント・エンゼル、とでも言つて置くわ。貴方が私のマスターね、まあ仮初だけね~、でも私を楽しませてね、退屈は嫌いだから」

青髪の少女はそれを楽しそうに言つた、まるで新しい玩具貰つた子どものよみに無邪氣だ。

「なるほどなあ

二人は声がした方を向いた、そこにはさつきぶつ飛ばされた青いタイツ男が居た。

「もう少し寝てなさいよ、永遠に寝ててもいいのだけれどね」

エンゼルがそう言つとタイツ男は鼻で笑つた。

「ハンツ! そんな事する訳ねえだろ、それにサーヴァント同士が会つたら如何するか分かつてんだろう?..」

「ええ、そうねランサー、なら」

「そんじやまあ……」

「「戦いましょうかッ！－！」

二人は互いにそう言い合つと、互いの獲物を取り出した。タイツ男、ランサーはさつきまで使っていた紅い槍を、エンゼルはオレンジ色に光り輝く鍔の無い両刃の剣をそれぞれ持ち、ぶつかり合つた。

甲高い金属音が響き渡る…………ランサーの槍を剣で受け流すようにはらす、そして槍を回避し接近、切りかかるうとした。ランサーも負けじと突き出した槍を戻し、今度こそエンゼルを貫こうとし、突いた。

これはかわせないとランサーも確信し、そのままランサーの槍に貫かれた…………

かに思えた。

ランサーの槍は先端が少しだけ刺さっているだけだ。

ランサーは力を入れるが貫ける気配が一向に無い…………そして槍を引こうとしたが既にエンゼルの刃はランサーの頭を捕らえていた。

そしてそのまま切り裂かれた。

「……ツチ……避けられたわ」

「……今は危なかつたぜエンゼル」

ランサーは斬られる瞬間にマトリクス顔負けの避け方をし、頬を少しだけ深く切り裂かれた程度だった。

流石は最速サーヴァントであるランサーだ、他のサーヴァントなら今の攻撃でまず間違いなく死んでいたであろう。

ランサーは腕で頬に流れている血を拭う、その顔には確かに愉悦があつた。

「エンゼルのクラスってのはそんなに硬えのか？」

「ええ、そうね。私から言わせれば鍛え方が足りないとでも言って置くわ」

「よく言つぜ」

ランサーはそう言いながらも槍に魔力を込めていた。

「じゃあもう手加減はいらねえな…………その心臓、貰い受ける」

ランサーは走り出し、跳躍する。  
エンゼルはそのままたつていた。

「ハアアアアアアアアアアアアアアツツツ——！——刺し穿つ死棘の槍！！  
ケイ・ボルク

！」

ランサーによつて投擲された紅い槍、ガイ・ボルクは紅い閃光となり、エンゼルの心臓を狙う。

エンゼルは少し走つてかわそつとするがその槍は屈折し、そのまま心臓を貫いた。

それを見たランサーは顔を顰めていた。

「…………ツチ！」この程度か

余りの呆氣なさに

ランサーはエンゼルの近くに行き槍を抜こうとした。だがランサーの頸にエンゼルの膝蹴りが炸裂した。

「ベフ！？」

「…………全く、服を汚してくれて…………」

エンゼルはそれに怒りを覚える。

「ちょっと待て！—ゲイボルクで心臓貫かれたんじゃねえか！—何で死んでねえんだよ！—」

それも最もだ、普通は心臓に槍が刺さつた時点で死ぬ…………、だが普通じやなければ……

「天人にとつての死は死神に五衰を『えられる事…………それ以外で死ぬわけ無いでしょ、痛いけど」

そう、エンゼルのクラスにはA以上の固有スキルが『えられる、それは不老不死だ。

このエンゼルと言う名のクラスには不老不死のスキルがある、まともに戦つても普通に勝てる、言つてしまえば強すぎる為にめったに召喚されないのだ。

本当の意味でエンゼルのマスターにとつては一番いい存在でもあり、最悪な存在もある。

不死殺しの伝説、又は宝具を持たないサーヴァントでは勝てない為、マスターを狙うしかないのだ。

その為マスターは常に全ての敵マスターに命を狙われないといけないのだ。

「まあアンタにも簡単に分かるよ」といつて言つた

「…………俺つてそこまで馬鹿に見えるか？」

「少しだけ見えるわ、でもクランの種犬と言われたクー・フーリンには分からぬでしょ、日本の宗教なんて」

今エンゼルはランサーの真名と同時にものすげに事を言つてしまつた。

「まあな…………つて誰が種犬だコラああああああ

「アンタの師匠のライバルの女を孕ませたじゃない

「ち、ちが……「そこで動搖するんじゃないわよ、ぶつ飛びなさい」

ちよ、まつ「

ランサーが明らかに動搖していたのを良い事にエンゼルは手を翳す。

「かなめ石」

エンゼルがそう言つと大地から注連縄が付けられた巨大な石が出てきた、エンゼルはそれをランサーに投げつけようとした。

「…………つち…………わりいがここまでだ…………マスターからの命令が来た……」

「そう、なら帰りなさい、逃げる相手に興味は無いから

エンゼルがそう言つとかなめ石を手に上げた。  
どうやら飽きたようらしい……。

「すまねえな、この決着は必ずつけるーー！」

そのままランサーは立ち去つた、エンゼルも少しだけ次の戦いを楽しみにしていた。

そしてエンゼルは何かを思い出す。

「あ、すっかり忘れてた、マスター大丈夫？」

エンゼルはすっかり放心状態だった赤毛のマスター、衛宮士郎の方に向いた。

「…………マスター、大丈夫だった？」

「あ、ああ…………今のは…………それよりも君は」

「ああ、ちょっと待つて、今説明するから、どうせ何も理解しないマスターだって事は分かつてるから」

エンゼルは士郎の方に歩き出した。

「で、どうするの?」

少女説明中

「…………」Jの町でそんな戦いが…………止めなこと…………」

「まあそれが一番いいでしょ、でもその為には他のサーヴァントを全て倒さないといけないわよ?」

「…………戦うしかないのなら…………」

「迷つてゐながらまだ決めなくていいわ」

「いや、俺は正義の味方として…………何も関係ない人を危険に晒させない為に…………」Jの聖杯戦争を止めなくちゃいけない…………」

士郎は必死に考えそれで答えを出した。

「まあそれが正論ね、正義の味方ってのは少し可笑しいけれど…………」「これからよろしくね、マスター」

「ああ、Hンゼル」

## 召喚と説明（後書き）

一応アンケート？取ります。

次の三つの中からラストはどうな風なのがいいか選んでください。

- 1・ハッピーホンド
- 2・トウルーエンド
- 3・両方！

一応この中から決めます、投票は今のところ無期限です。

投票お願いします！

## ステータス・エンゼル（前書き）

短編の時の設定では強すぎたので改善します。  
本編を楽しみにしている方はもう少しお待ちください。  
風邪を引いていたので……

## ステータス・エンゼル

【クラス】 エンゼル

【マスター】 衛宮士郎

【真名】

【性別】 女性

【属性】 混沌・善

【能力】

筋力 C	魔力 B
耐久 A	幸運 E
敏捷 C	宝具 EX

【クラススキル】

不死：内臓などの損傷は再生できる、ただし肉体の一部が欠損した場合はその欠損した部分が無ければ再生できない。

上半身と下半身が分かれたり、首が千切れたりすると

流石に死ぬ。

### 【保有スキル】

単独行動：C

マスターからの魔力供給を断つてもしばらくは自律行動可能。ランクCならば、一日は現界可能。

戦闘続行：C

本来の場合は瀕死の重傷を負つても戦えること。

怪力：B +

怪物的な意味合いの怪力ではなく天人としての怪力。  
一時的になら筋力をA +まで引き上げる。

「ん、美味し」

サーヴァント・エンゼルはそのマスター、衛宮士郎のお菓子である饅頭を頬張っている。

士郎は台所で食事の準備をしている、誰の? エンゼルのに決まってい、なんで料理を作っている理由は……

「お腹空いたから何か作って」

その後「お菓子でもつまんで待ってるわ」と、言い士郎を台所に立たせた。

エンゼルは台所から匂いつてくれる、料理の匂いをかぎながら楽しみ待っていた。

だがエンゼルは表情を一瞬で変え、台所に行き士郎に話した。

「サーヴァントが来るわ、それも一体

「何だつてーーー?」

士郎は驚いていたがエンゼルは冷静だった、彼女であるならば普通は喜んだりするのであるが……。

「流石に」一休相手じゃかなりやばいわ、取り合へず逃げましょ！」

そう言つてエンゼルはかなめ石を取り出し、田線で「乗れ」と言つて来た。

士郎はそれに乗るとエンゼルもそれに飛び乗り空を飛んだ。

そしてそれと同時に一本の矢が飛んできた。

「……………どひじょり乱麻」

黒髪のツインテールで赤い服を着た少女、遠坂凜が一人の男に話しかけていた。

男は銀髪で赤と蒼のオッドアイ、「本当にこんな人がいるんだなあ」と、思わせてくれるような人間であるならばまず間違いなく絶対にありえない容姿をしていた。

そう、コイツこそが諸悪の根源である、一神乱麻だ。下手に名前まで中々が考えるような名前だつたら最早救いようが無かつた、既に救いようが無いけど……。

「そうだな……本来なら記憶を消したいところなんだが……もづ遅いかも知れない、既にランサーの餌食に……」

乱麻は困ったように言っているが「レは建前である、本心はこっちである。」

「（今こじで）アイツを救えばどうせ正義の味方だからほつとけないとかで乱すんだ、そもそもあいつ自身が居なくなれば俺が主人公になるんだ、アーチャーもあいつのせいできしんでるんだ、死んだ方が良いに決まってる。セイバーも俺が召喚したし、もしもイレギュラーでサーヴァントを召喚しても俺のセイバーの方が強いに決まっている）」

明らかに士郎に対して強い殺意と嫌悪感を抱いている。  
自分は特別な人間だ、とでも思っているのか？

「（大体なんで神は俺に無限の剣製をくれなかつたんだ！？士郎なんて魔術を使えない落ちこぼれでいいんだよー！）」

乱麻は神に対して怒っている、だが彼には無限の剣製は扱えない、

別の世界ならともかくこことはその本来の扱い手が居る世界。

固有結界は一つ一つ違うのには理由がある、固有結界は発動した魔術師の心象風景なのだ。

無限の剣製は衛宮士郎でなければ体得できないのだ。

「（だがあの偽善者は本来の魔術を使えない、そしてそれを知る者は居ない！体得する前に殺しちまえば！！）」

だが彼の予想は外れることになる、士郎が召喚したエンゼルが気付いて……。

「マスター！今からなら間に合いますー！」

青いドレス服の上に鎧を着た少女、セイバーが乱麻にそう言つた。

「さうかもな、よし！行くかー！」

「（死体の確認でもしてやるか）」

そして衛宮家の近くに来て……

「マスター、あの小僧と一緒に居るサーヴァントが居る」

赤い服を着たサーヴァント、アーチャーが喋つた。

「それはランサー？」

「いや、あの小僧の手に令呪がある、つまりあの小僧よ……」

アーチャー自身も少し驚いていたが次の言葉を口に出して言った。

「マスターだ」

「マジ?」

「ああ

この時のアーチャーの心情は「全く信じられなかつた」だった。

アーチャーにとつてこの世界は全く違つた世界だつた。

このままでは衛富士郎殺しも出来ない、しても意味は無いと思つていた。

彼の最愛の人であるセイバーは知らない男に召喚され、凛はありえないほどベタボレだ。

唯一の救いはセイバーがまだ完全にこの男に気を許していないと言う事だった。

この男は常に魅了の魔術を使つてゐる、正確にはそれに近い何かだ

チャーム

つたが……。

その為彼女も完全に心を許す事は無く、常に一線を引いている状態なのだが。

だが何かの偶然か衛富士郎はサーヴァントを召喚していた、青い長髪の桃帽子の少女だ。

少なくとも見たこと無い少女だった、そしてとても人間離れしていた。

「（何があのサーヴァントは…………？）」

少なくとも英靈ではない、恐らく亡靈でもない、生前の肉体をエーテル体に変え、サーヴァントと対等に戦えるようにしたような感じだ。

それがランサーと同等に戦えるようになった本当の理由だ、エンゼルももし生きて帰れる事が出来、その後英雄になるような行いをすれば英靈にいたる事は出来る。

「（あんな存在は見たこと無い……）」

そう、アーチャーにとつては全く分からぬ存在だった。  
まだ不確定要素がありすぎるため……攻撃はまだしないようにしたかった。

「アーチャー……狙え……」

だが一神乱麻はアーチャーに命令をした。

「な……マスター貴方……」

「ちょっと待ちなさい……！」

一人の少女はそれを止めようとすると、  
だがアーチャーには止める理由がない……！――

「…………了解した」

そう言ってアーチャーは黒い『』を取り出して……

衛宮士郎を狙つて放つた。

その矢はしつかりと士郎に臉らい着くより吸い込まれていくよう  
に進む。

だがその矢はかなめ石に当たり外れた、否、先に士郎が避けたのだ。  
正確にはエンゼルがそうさせたのだが……。

エンゼルはそのまま浮上し、橙色に光る剣を振るう。  
その刀身から橙色の斬撃が掃射され、アーチャー達に向かってきた。

その斬撃は七つに別れ、そのまま四人を襲う……。

第一話・戦闘開始

## 逃亡（前書き）

皆大好きあの外道が登場！

エンゼルの剣から放たれた七つの斬撃が4人を襲う・・・・・。

だがセイバーは見えない剣でそれをなぎ払い、アーチャーは白と黒の双剣を出し防ぐ。

乱麻は日本刀型の魔術礼装を取り出し切り裂く・・・・・・・・・・・・  
事は無く逆に圧されて日本刀が僅かだが曲がった。

だがそれでも弾く程度の事は出来たため結果的には防いだ。

「へそつたれ！..！」

乱麻はそう吐き捨てるとい、ギョッとした。

その理由は衛宮士郎のサーヴァントにあった。

青い髪に二つの桃が付いた帽子、それは乱麻の前世で見たある作品のキャラクターだからだ。

「（おいおい、マジかよ・・・・・・何で東方のキャラが居るんだ  
よつーーー？）」

乱麻は少しだけ動搖したがそれも一瞬だけで、心の中で笑った。

「（はつ、東方のキャラが居るんなら幻想郷に行つてフラグを立てるのも悪くないな）」

たとえ違っていてもアレほど美少女だ、惚れさせてハーレムに入れるのも悪くないな。

心の中でそう思っていた。

そして心中で笑っていたが、それがいつの間にか顔に出ていた。それを見た凛はアーチャーに頼んで少し離れるよう頼んだ。アーチャーはそれに従い凛を抱き抱え、数歩分後ろに下がった。

セイバーは顔を見ないようにするため乱麻の前にでた。

「（……………今回のマスターも外れですね……）」

セイバーは心中でそう思っていた。

「（ですが……………祖国ブリテンの為に……………必ず聖杯をつ……）」

そしてそれ以上に聖杯を望んでいた、それは自分のマスターを殺してでもと…………。

「・・・・・・・・・まざいわね」

エンゼルはかなめ石に乗ったままそう呟いた、上昇を続けながら・・・

「何がまずいんだ、エンゼル！」

土郎はかなめ石を必死で掘みながらエンゼルに聞いた。

エンゼルは冷静にそう答えた、後半は半ば脅しだつたが士郎はエンゼルの言つ通りにかなめ石をを掴む力を強くした。

「...マスター、質問よ」

エンゼルは唐突に質問した。

「このまま戦う？ それとも逃げる？」

二  
折だつた

「…・・・・・・戦うを選んだ場合はどうなるんだ?」

士郎は聞いた、質問の意味を

「戦うなら敵マスターを殺すわ、流石にサーヴァント一体相手に勝つ自信はないからね、だけど地面に足をつける生き物相手なら絶対に負けない自信があるもの」

それが一番簡単に、相手に勝つ方法だ。

いくら強力なサーヴァントでもマスターを殺せば良い、そしてサーヴァントが新しいマスターと契約する前に殺せば良い。

それがこの聖杯戦争で楽に勝ち抜く為の方法だ。

「そんなのは駄目だ！マスターとはいえ・・・・人を殺すなんて間違ってるつ！！」

だが士郎はそれをしなかった。

正義の味方を目指している彼には自分の命を狙う敵とは言え、人を殺したくは無いのだ。

「分かつたわ・・・・・・なら逃げるに決定ね！」

エンゼルはそう言つと、上昇を止め、逃げ出した。

だがアーチャーの矢はしつこく、エンゼルを・・・正確には士郎を狙う。

エンゼルも負けるわけにはいかなく、高速で避け続ける。

「……中々当たらんな

アーチャーは苛立つていた。

アーチャーのクラスは遠くにいる相手を倒すのには打って付けだろう……そういう意味では最強だ。

だがそれはあくまで相手が地面に足がついてる場合、もしくは相手が宙に浮いており体制を変えられない場合だ。

だがエンゼルはそのまま飛行し続けていて、それに常に障壁を張つているのだ。

アーチャーの矢はどぐくと同時にその威力を減らされずさらわれる。

「……ならば……」

アーチャーは一本の剣を投影する……その剣は捻じ曲がっており斬る事より貫くことしかできないと言った印象だ。

「— I am the bone of my sword 『体は  
剣で出来ている』……」

その剣を矢に見立てて『』を構える、剣の形は変わり矢に変わる。

「アーチャー……止めなさい……！」

凛がアーチャーに命令する、だが既に手遅れ……

「偽・螺旋剣

カラドボルグ

！……」

「…………ヤバイわね…………」

エンゼルは冷静に観察する、その先にはアーチャーが居た。  
アーチャーは膨大な魔力を使っている、エンゼルは宝具を使うのだと判断した。

「土郎、私にしがみつきなさい…………」

「なつ……？ちょっと待て……女の子にそんな事」

「良いから早く……！」

エンゼルの霸氣に押され士郎はエンゼルの腰にしがみ付く。

「…………氣質、魔力を集めて…………放つ、あいつが放つより一秒前に」

エンゼルは剣を自身の後ろに向け、魔力を集めた。集めて集めて収束し、爆発寸前まで溜め込む……。

そして、時が止まつたかのように空中で制止する。

一秒…………まだ早い。

一秒…………士郎が緊張と吐き気で体調を崩しかけている。

三秒…………、そこでエンゼルは集めた魔力を全て放出した！

アーチャーが放つた矢はその瞬間放たれた！

僅かではあるがエンゼルの方が少しだけ早く動いた、一瞬とは言えその差はアーチャーが放つた弓をかわせると言う事実だ、エンゼルが放つた魔力は逃亡にだけしか使わず、その一瞬の間ですれすれではあるがかわせた。

アーチャーが放つた矢はエンゼルの魔力のレーザーに飲み込まれた、その時点でアーチャーが放つた時の威力は完全に消滅した。

だがその矢に残っている魔力は違つた。

その矢は硬イ稻妻カラドボルゲの投影品（贋作）が形を変え剣から矢に変わつた

物だ。

言つてしまえば宝具だ、つまり……

「壊れた幻想」  
ブローカン・ファンタズム

壊れた幻想ブローカン・ファンタズム、それは聖杯戦争で一回しか使えない最後の手段だ。

宝具の数によつてそれが出来る回数も違うし、威力もランクによつて変わる。

だが、マトモにくらえればサーヴァントと言えど良くて重症、悪ければ確実に死ぬ一撃だ。

だがこの『兵はそれを意図も簡単に使って見せた。  
つまり何度も使えると言つ事だ。

煙が晴れる間も無く、一筋のレーザーが放出された。

その勢いは煙を生み出した気流で吹き飛ばし、そのまま消えうせた。

つまり、エンゼルたちは逃げる事に成功したのだ……！

「…………逃げられたか」

アーチャーは静かに、しかし惡々しげに咳いていた。

「…………今からでも遅くない……追つて殺ツ……！」

ドスッ！

乱麻がじつにく士郎を殺そつと書つがセイバーに腹を殴られてその

まま気を失つた。

「…………暫く寝てなさい」

セイバーは乱麻を「ミ虫を見るような目で見ていて。  
最早マスターとして認められていなかつたのだ。

「…………ねえセイバー、乱麻とじやなく私と組まない？それなら

「

「それも良いかも知れませんね」

乱麻とセイバーの関係は既に崩壊していた。

「…………（できれば私は士郎に呼ばれたかつた…………）」

「…………逃げ切れた…………」

「…………ああ、そうだ……ウフ」

エンゼルは逃げ切れた事に安堵しており、士郎はあの速さで飛行した為吐き気を感じていた。  
今いる場所は教会がある所だった。

「…………取り合えず今は」

「よく来たな、八体目のサーヴァントに八人目のマスター」

エンゼルと士郎の後ろから響く声、それは不気味ば声だった。

「私は此度の聖杯戦争の監査役、言峰綺礼だ」

## 教会（前書き）

スーパー外道タイムスタートです。

すみません、言ってみたかっただけです。

ともかく外道な神父事言峰綺礼がメインな話始まり始まり～。

言峰教会……。

冬木市にあるたつた一つの教会、そこに一人の男と、一人の少女が居た。

赤毛の少年に神父服を着て薄く笑う神父、青い髪をした明らかに常人離れした少女。

その教会で会話が行われていた。

「では改めて…………ようこそ、言峰教会へ。この教会の管理を任せている言峰綺礼という。君は聖杯戦争の八人目……、最後でイレギュラーなマスターとそのサーヴァントで間違いないか？」

教会に響く重厚な声。

俺は何故かは分からないがそれが不快だった、まるでこの男の腹の中に居るような感じだ……。

そして見透かされている気もする。

「ああ、間違いない」

エンゼルはこの男、言峰綺礼を見ようとすらしない。

単純に教会が珍しいのか、興味が無いのか、もしくは言峰綺礼を気味悪く思っているのか……恐らく全てだろつ。

そう思つていたらエンゼルが唐突に言峰綺礼を見る。

「何で私たちがサーヴァントとマスターだと分かつたの？」

それが一番の疑問だった、確かに空からやつてきたが言峰綺礼は何故來るのを知つていたのか……。

「それは簡単な事だ、少年の手にマスターの証である令呪があるのでな。それでマスターだと分かつただけに過ぎない」

言峰綺礼は薄ら笑いをし、そう言いのけた。

だがエンゼルは明らかに言峰綺礼を疑っていた、エンゼルがこの男を疑つように俺もこの男を、言峰綺礼を信用できない……。

「…………だが可笑しな事もあるものだな、まさか八人目のマスターにも令呪がちゃんとあるのだから」

「…………何が言いたいんだ」

「いやなに、ただの独り言だ。それで君の名前は何とさうのだ？」

話を逸らしていたが単純な疑問らしかった。

そんなに令呪がある事がおかしかったのか？

「…………衛宮士郎」

俺が名前をさうと言峰綺礼は僅かにだが口元を歪ませ、笑い始めた。

「…………衛宮……。そつか衛宮士郎か……。ククク、成る程な

言峰綺礼は愉悦を隠そつとしないで笑っている。

自嘲でもなく嘲笑するものでもない、単純に歡喜していたのだ。

「何が可笑しい……！」

俺が怒鳴ると言峰が笑いを止める。  
いや、口元は笑っていた…………。  
そして言峰は少し溜めると…………、

「喜べ、衛宮士郎。この聖杯戦争を勝ち残り聖杯を手に入れれば、  
お前の内に溜まつた泥を全て吐き出すことも可能だ」

奴は何を言つている？

『内に溜まつた泥』だと？　何の事だ…………？  
不思議に思うと同時に恐怖する、言峰は俺の事を知つており、そし  
て見透かされていることに…………。  
いや、見透かしてはいないうちがそつ錯覚する…………。

「…………何を言つてこる」

俺のその言葉を待ち構えていたかのように言峰綺礼は自身の嗜好を  
わらけ出し始めた。

「前に聖杯戦争が起きたのは十年前、その最後に起きた聖杯戦争の  
爪痕は君もよく知るところじゃないかね…………？」

「なつ…………！」

十年前だって…………！…………？

まさか……

「その様子では分かつたようだな、その通りだ。未だ原因不明とされていいる十年前の災禍こそ、前回の聖杯戦争によるものだ」

十年前の冬木で起きた未曾有の大火災。それこそこの俺、衛宮士郎にとつて最大級の精神的外傷だ。

あの地獄の光景は今も網膜に焼き付きついている。

視界にあるのは赤

空は赤く染まり業火に包まれ倒壊する家屋……。

呼吸するだけで肺が焼きつきそうになり、鼻腔を刺激するのは充満する死の匂いと……。

人の焼ける匂いッ！――！

「あ

」

フラツシュバックする生々しい記憶……。

人が助けを求めてる、親がこの子だけでも、と子供を差し出してきたのを無視する。

何も考えないようにしていた、それでも死ぬのが怖かった。

助けて助けてと何度も咳く人たちを無視し歩き続けた。

「めんなさい、めんなさい」と言いながら。

……。

「大丈夫？」

エンゼルが言つた言葉で現実に引き戻される。耳の奥では未だに燃えかかる業火の音と体を焼かれ悲鳴を上げる人たちの叫びが聞こえていた。額からでた汗を今着ているトレーナーで拭う。

「……大丈夫だ、問題ない……」

「じゃあ無いわね、どう見ても」

エンゼルが心配そうに俺の顔を見上げていた。普段ならばエンゼルのよう可愛い女の子に見上げられてたら照れるが今はそんな気分じゃない。

「クククッ。……大丈夫かね？衛富士郎」

今を見てれば分かるはずだが言峰綺礼はワザと言つ。言峰の顔は笑つていて、俺の顔を見て心底オモシロそうに笑つ。こいつは人として歪んでいる。

そして、次の標的に言峰はエンゼルを見た。

エンゼルは少し後ずさり、言峰の濁つた目を見た。

「……な、何よ」

「それはそうとおもしろいサーヴァントを引き当てたものだ、今回で五度目を数える聖杯戦争において最大のイレギュラーを引いたと言つても過言ではなかろう」

本当に言峰がエンゼルを見て不快そつだがそつ言つた。  
言峰は何故かエンゼルを不快そつた目で見る。

「此度の聖杯戦争のクラスは既に全て現れている、彼女が何のクラスに該当するのか聖杯戦争の監督者である私ですら分かりかねる」

「なんだそんな事か」

エンゼルは心底どうでもいいような顔をしていた。

言峰の態度が気に入らないのか、撫然とした様子で適当に受け流す。  
もしかしたらだが、この少女は聖杯自体に大した興味がないのだろうか。

「まあ良いわ、私のクラスはエンゼルよ」

「……成る程、<sup>エンゼル</sup>天使か」

言峰が急に頭を下げる。

「それは失礼したな」

「いいわ、頭なんて下げなくても。貴方信仰してないようだし」

「ならば、ならば普通でいる事にしよう」

確かに教会では天使は神の使いだからな、言峰が頭を下げた理由は分かつた。

だが神父が信仰してなくて良いのか？

「ならば、この聖杯戦争のルールを教えよう」

その後、俺とエンゼルは聖杯戦争について監督者たる言峰綺礼から詳しく述べてもらうことになった。

エンゼルからも大まかに聖杯戦争のシステムを教えてもらつたが、その補足と疑問も兼ねてのものだ。

俺としては一刻も早くこの場から立ち去りたかったが、どうもそれを許さない雰囲気だった。

そして長い話は終わり……。

「では、ここに聖杯戦争の開幕をここに宣言する。衛宮士郎、思つ存分戦うがよい。聖杯は願望機だ、どんな望みも叶えられる。そう、すべてをはじめからやり直すことも可能だ」

言峰が何を言いたいか理解した。

だけど、俺にそんなつもりは毛頭もない。アレを無かつたことになんか決してできない。

確かにやり直したくないと言えば嘘になる、でもアレを忘れる」とだけは出来ない。

俺とエンゼルは言峰に背を向けて、無言で教会の外へと向かう。

「聖杯戦争は始まった。いついかなる時も、気を配らせる」ことだな

俺たちは言峰に振り向かず、そのまま教会を出て行った。

「

教会で吐てられた空氣を全て入れ換えるように何度も深呼吸する。時計を見ると、日付も変わってからかなりの時間が過ぎていた。

そしてそのまま冬木大橋を超えて深町の住宅街を歩いていると、エンゼルが急に立ち止まつた。

「どうしたんだ？」

「……士郎、アンタって運無いでしょ

エンゼルにそんな事を急に言われた。

確かに今日、日付が変わったから昨日は運が無かった。

だが今日も運が無いわけでは……

「……走るわよ」

エンゼルが俺の手を掴むと走り出した。

そして氣付いた、俺たちを追つてきてる奴が居ることにな。

そして人気が無いところに来て……

「……逃げるのは無理そうね……」

エンゼルが半ば諦め、そして後ろを見た。

後ろには鉛色の巨体とアルビノの少女が居た。

「 こんばんは、お兄ちゃん。 ううして会のは一回だね」

少女がそういうとエンゼルは身構える……。

「あ、そういうえば自己紹介がまだだったね。私の名前はイリヤスフ  
ィール・フォン・アインツベルン。聖杯戦争のマスターよ

なんだつて……？

こんな小さい少女が……マスター？

「そしてこれが私のサーヴァント、バーサーカー」

白い少女が後ろに居る鉛色の巨人を見た。  
その巨人から感じるのは圧倒的な力だ。

「知り合い？」

「……いや、数日前にすれ違つただけだ」

エンゼルが俺に聞く、だが俺自身彼女を、イリヤを知らない。

「アハハ、ずっと待つてたんだよ、教会から出るのをね」

イリヤは笑いながらそう言う。

そして口角を吊り上げ、酷薄な笑みを作る。

「やつちやえ、狂戦士」  
バーサーカー

## 狂戦士と永遠幼女（前書き）

非常に難産でした……。  
そして少しギャグを入れてみました

バーサーカーが振り下ろした岩で出来た無骨な斧剣をエンゼルと俺  
目掛けて振り下ろした。

エンゼルはその攻撃を土郎を抱えかわした、だが右肩から血が飛び  
散った。

「離れてもあのパワーだなんて」

エンゼルは苛立つ様に叫ぶ。

「凄いisho、私のバーサーカー」

イリヤはそれを誇らしげに叫ぶ、何であんな小さい子が……。

「教えてあげるよお兄ちゃん、私のバーサーカーの真名はね  
ヘラクレスなんだよ」

「へラクレス…………？」

「そう、ギリシャ神話に出てくる大英雄」

「……厄介な」

エンゼルがそう言つのも無理は無い、あれは本当に危険だ……。ヘラクレスの名前くらいは知つてゐる、聖杯戦争では知名度も重要なものになるのだから……。

「なんでだ、イリヤ…………なんで」

何でイリヤがこんな戦いをしなくてはいけないんだ……。いくらヘラクレスほどの大英雄がいたとしてもイリヤが死んでしまうかもしれないのに……。

「教えてくれイリヤ！なんで俺を」

「それはね、お兄ちゃんが切嗣の息子だからだよ」

イリヤが淡々と答えた……。

「昔ね、私の家『アインツベルン』に雇われていたからよ。十年前に起きた聖杯戦争で聖杯を入れる為にね」

「なつ…………」

そんな事は聞いた事が無かつた、親父が前回の聖杯戦争に参加していただなんて……。

「そこ」で切嗣は私のお母様と子を成したわ、それが私

「…………じゃあ俺とイリヤは兄妹になるのか？」

「そうね、まあそうなるわね」

「ならなんで士郎を狙うの？」

エンゼルも会話に入ってきた、そして俺は何時間にかかなめ石に乗つて空を飛んでいた。

何時間に……。

「切嗣はね、前回の聖杯戦争で勝ち残り聖杯を手に入れる寸前まで行つたわ……でもね、切嗣は聖杯まで後一步つて言つところに来て自分のサーヴァントを使って聖杯を破壊させたのよ」

親父が聖杯を破壊した？

「それで大爺様はかんかんでね、でもまあ私は……」

イリヤは田を閉じ……

「士郎を殺したいだけなんだけどね」

笑顔でそう言った。

「まあ士郎が私の人形になつてくれたら見逃してあげてもいいけどね」

「…………ククク」

そう言つてイリヤを見て笑うエンゼル。

「…………何？」

「いいえ、何も

明らかにエンゼルは笑っていた、あざ笑っていた。

「いいから言いなさい、そうやってもったいぶられるのは嫌だから」

「なら、言いますわ」

エンゼルは少し溜めると……

「貴方のような永遠幼女エターナルロリータにそんな台詞が似合つと思っていたの?バ  
力じゃないの?」

「はつ?」

「……狂いなさい、バーサーカー」

「

ツツツ!――!

バーサーカーは咆哮を上げ俺達に襲い掛かってきた。

つて

「何言つてんだよ……エンゼル……」

「何つてあの暴言?」

「ナヘリだよ……」

「本当の事じやないこ

「だから何で向ひのまわ……」

「決まつてゐじやない、面白いからよ……」

「なんでもある……」

俺は改めてこのサーヴァントの本質を知った。  
そしてそれと同時にイリヤが……。

「大丈夫だよお兄ちゃんは死なないから

笑顔で言つていた、だが田だけは笑つていなかつた。

「取つ合はず四肢は無くなるけど

「なんでもさ……?」

「殺される……俺殺される……

殺されはしないけど確実に四肢が無くなる……

「良かったわね、生きれるわよ

「そんなんじゃ死んだ方がマシだぞ！！」

「爺さん、俺…………！」で死ぬかもしない。

「じゃあ殺りなさい、バーサーカー」

「ツツツ…………！」

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
引き裂かれる！－四肢を引き裂かれる！－

「ツ－－！－？」

あれ？バーサーカーの右足が地面に埋まった？

「……………」

見る見るうちに地面が割れその間にバーサーカーが落ちていった。  
バーサーカーの声がどんどん遠くなっていくからかなり深いんだろう  
うか…………。

「バーサーカー－－？」

イリヤが悲痛に叫ぶ、そしてどんどん割れた地面が戻っていく…………。

「ふう、まさかあそこまで上手くいくとは思わなかつたわ

コイツが犯人だつた。

「さてと、じゃあ<sup>エターナルロリータ</sup>永遠幼女。アンタが一番最初の脱落者よ」

「<sup>エターナルロリータ</sup>永遠幼女じやないもん！…これでも一八歳だもん！…」

「<sup>エターナルロリータ</sup>永遠幼女じやない、まあここで死ぬあんたには終つた話になるんでしようけどね」

そいつ言ひてエンゼルは剣を振り上げる……。

「待つてくれ！…エンゼル！…」

「何で待たないといけないのよ」

エンゼルは少しあせつたよつて言ひた。

「ふん、お兄ちゃんは失敗したね」

イリヤがあざ笑いながらそいつ言ひ。

「今ここで私を殺しておけば……」

地面が揺れる、エンゼルは跳躍し俺が乗つているか石に立つ。すると地面から巨大な鉛色の腕が生えた。

「つち……」

「さて、お兄ちゃん達ー！今日は逃がさないからねーーー！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3574y/>

Fate×東方 あたしを誰だと想ってるの！？

2011年12月20日20時52分発行